中京大学　心理学研究科・心理学部紀要
第3巻 第2号（2003）9―15頁

子どもの発達環境調整者としての親の役割とその心理的背景

―幼稚園選びの分析を通して―

中京大学心理学部　小島　康生[注1]

Roles of parents as managers of the environment in which their children develop: Analysis of the process by which parents select a kindergarten for their children

KOJIMA, Yasuo（School of Psychology, Chukyo University, Yagoto-Honmachi, Showaku, Nagoya 466-8666）

To explore the roles of parents as managers of the environment in which their children develop and the psychological background of the parents, narratives written by the mothers of 2- to 3-year-old children on an anonymous online message board listed on Yahoo! Japan, a popular internet site, were analyzed. On this message board, information is exchanged regarding the selection of a kindergarten primarily by the mothers with preschool children. The narratives were classified into several categories based on related words and phrases for 197 contributions to this online message board between January and October 2003, and a conceptual framework was developed by integrating these categories. The analysis revealed that, with respect to their children, two main dimensions of environments were considered in kindergarten selection for the children; the ability to enhance the child's development in various areas, and comfortableness. The findings also indicated that the child's disposition mediated these two dimensions. On the other hand, with regard to parental needs, three dimensions（physical cost, economic cost, and psychological satisfaction）were considered. Apparently, a particular kindergarten was selected by counterbalancing the costs and benefits not only for the child, but also for the parents. The results also suggest that parents believe that there are some critical and sensitive periods during which their children can acquire certain knowledge and/or social skills.

Key words: kindergarten selection, parental management, environment

問　題

人はじつに多様な環境のなかで生活を送っている。では，子どもを取り囲む環境はいったいどのように分類することが可能だろうか。衣類，食器，家具，玩具，絵本といったモノを主体とする環境や，家族をはじめとする社会的な環境，あるいは地域や文化，歴史に根ざしたものの考えかたや価値観など，いくつかの層に分けて捉えることが可能のようである（Bronfenbrenner, 1999）。

では，そうした環境は子どもが生まれた時点で何もかもが決まっているのか，それとも誰かが環境を操作的に調整しているのか。これも内容により異なるであろうが，とりわけモノ環境や社会的環境については，親が多くの部分で子どもの環境調整を行っており，しかも子どもの年齢が低いほど，その役割は大きいといえそうである。乳幼児期の子どもの衣服を選ぶのはふつう親だし，玩具環境を整えるのも最初は親である。どの公園へ，どの時間帯に子どもを連れ出すか，どの子どもと遊ぶよう仕向けるかも，かなりの程度は親の意向で決まるといってよい。

しかも，どのような環境に囲まれて生活するかは，子どもの発達と密接に関係している。食生活が子どものあごの発育に関係しているという指摘や，マンションの高層階に住む子どもが，低層階や戸建ての家に住む子どもに比べて生活習慣の自立が遅れるというような報告（Oda, 1989）は，与えられた環境が直接・間接に子どもの発達に関与することを示す例のひとつである。こうした環境は，developmental niche と呼ばれることもある（Harkness & Super, 2002）。

ところで，Bradley（2002）は，親が子どもに与

注1　ykojima@lets.chukyo-u.ac.jp

える環境を大きく5つの側面に分類している。第一は，栄養状態をはじめ身体の健康に関係するものである（sustenance）。これにはバランスのとれた食生活を保つこと，大気汚染やタバコの煙から子どもを守ることなども含まれる。第二は，認知的，運動的，社会的な発達にかかわるような刺激である（stimulation）。物そのものだけでなく遊園地へ子どもを連れて行く，興味を引く絵本やおもちゃを買い与える，などもこれに該当する。第三は，社会的，情動的なサポートである（support）。子どもの価値を受けとめ安心感をもたらすような人的環境がこれに含まれる。第四は，以上の3つを時期や文脈に応じて，適切に組み合わせ，調整・組織化することである（structure）。第五は，そうして提供された環境がうまく子どもにかみ合っているかをつねに監視することである（surveillance）。以上のような環境調整が親によって日々おこなわれ，子どもは，親が準備した環境のなかで生活しているといっても過言ではない。だが，これらを包括的に捉え，そこで親が何を考え，背景にどのような心理がはたらいているのかという問題は，じつは十分に検討が進んでいない（Bradley, 2002）。

そこで，本研究では，「幼稚園選び」を具体的な題材に選び，これらのことを解明しようと考えた。子どもが入園する幼稚園は，通常，子どもの意志でというよりも，親の考えを反映するかたちで選ばれていく。このため，親が子どもの環境調整に際して，どのようなことがらを重点的に考え，また背景にいかなる心理がはたらいているかを検討するのにたいへん好都合な題材であると考えられる。

わが国では，満3歳の誕生日を過ぎた最初の4月に，子どもを幼稚園に入園させる，いわゆる3年保育が一般的である。最近では，満3歳の誕生日を過ぎれば随時入園を認める幼稚園も増えつつあるが，依然として3年保育が割合として多いことには変わりない。入園手続きは通常，入園の前年10月1日から始まり，人気のある幼稚園だと手続き開始日の早朝もしくは前日から並ばないかぎり，願書提出が叶わないほどだという。そのうえ，これに先駆けて幼稚園を選ぶ過程では，何ヵ月も前から情報収集するのがふつうで，多くの親はどの園に子どもを通わせるかに頭を悩ます。なぜ，それほどまでに，多くの親が幼稚園選びに多くの時間と労力を割くのか，その背景には何があるのか。この点についても触れてみたい。

本研究が用いた資料は，インターネット掲示板での投稿記事である。ごく最近の調査では，子育て中の親が困ったときに頼りにする情報源にインターネットを挙げる人が激増しているという。実名を公表することなく本音で自分の意見や疑問を投げかけることができるうえ，時間帯を選ばずいつでも迅速に情報が得られるところも，掲示板利用者の増加を促す原因であろうと考えられる。今回は，最大の掲示板システムの一つであるYahoo! サイトでの幼稚園情報関連の掲示板を分析の対象とした。

方　法

資　料

Yahoo! 掲示板において，幼稚園選びに関係する情報交換の場となっているスレッドを対象に，投稿された内容を分析資料に用いた。本スレッドは2003年1月21日に作成され，幼稚園選びに苦慮する母親同士が自分の悩みを投稿したり情報を得たりする場として利用されていた。本研究では，このスレッドでの2003年1月21日から10月1日までの197件の投稿内容をもとに，本研究のテーマと関連が深いと筆者が判断した内容をひとつひとつ取りあげ，それらをカテゴリー化したのち，整合性をたしかめつつカテゴリー同士の関連を検討するというプロセスを経て，質的にデータを分析した。具体的には，はじめの50件の投稿文により，以上の作業を行ったのち，残りの投稿文を用いて，最初に作成したカテゴリー等の精緻化をはかった。さらに，加筆・修正を経て最終的に完成したモデルに基づき，再度，全投稿文を読み直し，矛盾がないかどうかを確かめた。

モデルの妥当性

本スレッドに基づいて作成されたモデルが妥当なものであるかを確かめるため，他のインターネット掲示板での同種のスレッドについて，投稿内容がこのモデルに合致するかどうかを検討した。修正が必要と思われる箇所は認められず，このモデルが妥当なものであることが確認された。

結果・考察

本研究の分析から明らかとなったモデルを図1に示す。以下では，この図をもとに，具体的な投稿文を事例的に書き加えながら，分析結果を記述し，あ

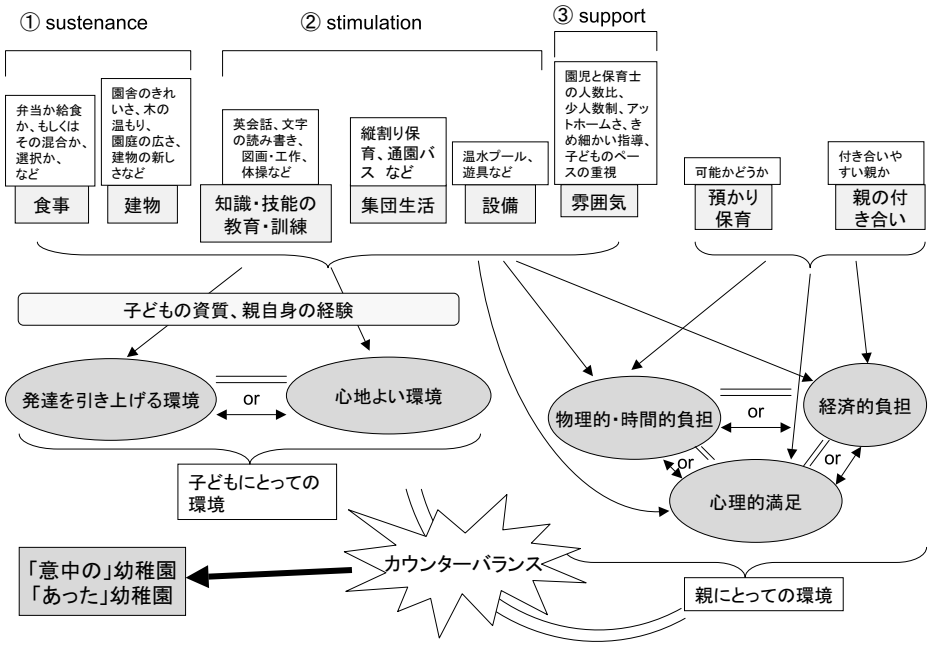

図 1.　幼稚園選びのプロセス

わせて考察をすすめる。

1. 子どもの環境調整者としての親

当初の予想どおり，幼稚園入園を目前に控えた子どもの親には，子どもの環境を調整できるのは親であるという強い信念と自負が存在することがわかった。しかも，子どもの年齢が低いほど，そうした親の役割は重要で，極端な言い方をすれば，親には，子どもの環境を調整する責任があるという，ある種の思い込みのようなものすらあるようであった。ある投稿者は，このことに関連して「（中略）特に子供が幼ければ幼いほど親が用意した環境にしか属せませんから……（投稿 79）」，「（中略）子どもが幼いうちは親の意思で環境が決まる」という表現を用いていた。

では，親はどのような側面について子どもの環境を調節しようと考えているのか。先に紹介した Bradley（2002）の枠組みを参考に，親が幼稚園に求める子どもの発達環境を分類し（図中の①，②，③），それらを大きく束ねる 2 つの概念を導いた。

ひとつめの概念は，子どもの発達を引き上げることに関係するもの，ふたつめは，心地よさである。前者としては昼食の形態がまず考えられる。給食の導入は，栄養のバランスが整った献立を子どもに提供し，食べ物の好き嫌いを軽減する効果があるうえ，みなで同じものを食べるという連帯感や給食当番のような役割経験をも提供するであろう。また，英語，読み書きのようないわゆる「お勉強」や図画・工作のような創作活動を積極的に取り入れたカリキュラムは，子どもの発達の引き上げにもっとも密接に関係したことがらであるし，ほかにもプールや遊具のような設備の充実や，縦割り保育を中心とする異年齢間の交流を重視したカリキュラムもまた，社会性の発達に刺激をもたらすという意味で，このひとつめの概念と関係が深いであろう。あとで別の観点からも触れることになる通園バスという形態もまた，年齢の枠を超えてさまざまな仲間と触れ合う貴重な場であるため，子どもの社会性発達を刺激する効果が期待される。

いっぽう，子どもに提供される環境のもうひとつの側面である心地よさとは，その環境が子どもにとって違和感のない，ストレス性の低いものであるかを意味しており，上に述べた教育方針や食事形態は，同時にこの心地よさという側面とも関連している。お勉強重視のカリキュラムに居心地のよさを感じる子どももいるが，同時に，思う存分身体を動かせる環境が整っていることに心地よさを見出す子どももいるのはいうまでもない。体質上（たとえば，アトピー性皮膚炎など），給食はむしろ子どもに負担をもたらすという場合もあるだろう。すなわち，最初に挙げた子どもの発達の引き上げという問題と，それが子どもにとって心地よいか，という問題とは，

つねに両立の関係にあるわけではなく，いっぽうを優先させると他方に弊害が生じることが起こりうる，たいへん危うい関係にあるのだといえそうである。

ところで，心地よさという意味では，担任教員と子どものかかわりあいの質や，そこに起因する教室全体の雰囲気もまた，重要な要素をなしている。これらは，クラスの人数編成によるところも大きく，少人数制であること，園児数に比して担任教員の人数が多いことなどが，「目が届く（投稿118)」，「ゆったり子どもに接する（投稿4)」，「アットホームな雰囲気である（投稿73，74)」という印象に強く影響しているのである。見学会のような場で感じた印象を大切に考える親もおり，「園児が多いのが気になった（投稿153)」という投稿からも明らかなように，人数編成がマイナスイメージにつながることもあるようである。

こうして考えると，親が幼稚園選びに際して苦悩することがらのひとつは，子どもにとってその環境がもつ発達引き上げの側面と心地よさの側面とを十分に吟味したうえで，最も程よい環境を見つけ出すことではないかと考えられる。なお，ここで重要なのは，子どもの資質に基づき，環境の変化が子どもに与える衝撃を予測し，見極めを行うことである（これは，Bradley のいう，親が子どもに提供する4つめの環境＜structure＞に相当する)。しかも，子どもへの衝撃という点については，幼稚園への入園だけでなく，もっと先に起こる小学校入学までを見据えた幼稚園選びがなされているケースもあった。

自分の子どもが通う小学校は，通常，住居がどの学区に含まれているかによって決まるので，自宅からあまりに離れた幼稚園を選ぶと，小学校入学のときに同じ幼稚園を卒園した仲間がほとんどいないということが起こるのである。小学校で以前からの顔なじみがいないことは，子どもにかなりのストレスを強いる。幼稚園選びの過程で，このようにずっと先に起こりうる事態を考慮に入れる親もなかにはいるのである。

最後に，幼稚園選びの過程で意外に重要な役割を果たす，親の経験について取り上げたい。自分が幼少期に通っていた幼稚園に自分の子どもも入れたいという強い希望を持つ親がいるようである。この傾向は，カトリック系の幼稚園やシュタイナー教育のような特別な教育方針を標榜する幼稚園に特徴的であるようだった。

以上に述べたような経過を経て，「子供にあった（投稿60)」，「意中の（投稿6，11)」幼稚園が選ばれていくのだが，その背景には，結果の冒頭にも述べた，この年齢段階の子どもの親に特有の自負と責任感，プレッシャーが存在する。すなわち，子どもの環境を操作できるのはほかならぬ親なのだから，何としても良い環境を提供してやらねばならないという強い思いである。しかし，なかには，なかば強引に発達の引き上げの側面を優先させ，「いまはわからなくても，後になってその良さが必ずわかるときがくる（投稿26)」という親の論理で，子どもの幼稚園選びをしてしまうケースもあるだろう。こうした考えは，親の価値観や信念を子どもに過剰に押しつけ，結果的に子どもを追い込むことにもなりかねない。このことは，早期教育の弊害についての議論とも密接にかかわっているのだが，本稿ではこれ以上この問題には触れない。

2. 子どもの発達を「引き上げる」ということ

ところで，子どもの発達が引き上げられるような環境を，という親の心理の背景には何があるのだろうか。ひとつには，「早ければ早いほど発達の引き上げが効率的に行われる」という信念の存在である。子どもが3歳から4歳にかけての時期であることは，親にとって特別なことのようで，この時期を逃すとせっかく引き上げられたはずのものが引き上げられなくなってしまうという，ある種の思い込みがあるのかもしれない。とくに，知識教育や技能訓練は，幼い時期であるほど修得が早く，能力の向上も見込めるという考えかたが背景にある。

いっぽうで，「ある能力の発達には最適な時期がある」という考えも親にはあるようだ。とくに，集団生活や社会的な刺激について，そういう信念が強く，その時期を逃すと，集団生活になじめない子どもになってしまう，という強迫観念に近い感情すらもつ親もいるようである。言い換えるならば，その最適な時期がまさに幼稚園選びの時期に重なるといえそうである。

こうした「最適の時期」という考えは，制度上の問題にも発展しつつある。従来の幼稚園制度にしたがえば，生まれ月しだいですでに入園時に4歳近くに達している子どもがいるいっぽうで，3歳の誕生日を過ぎたばかりの子どももおり，この約1年の開きはとくに年少児クラスで大きく感じられる。4月生まれの子どもは，満3歳を過ぎてのち約1年を家

庭で過ごすことになり，子どもを集団生活になじませ，社会的な活動に参加させたいという親の希望が遂げられないのである。この考えを汲んだ制度が，先にも触れた「満３歳児保育制度」である。だが，この制度は，たしかに親の考える最適の時期に，集団生活という環境を子どもに提供することを可能にはするが，いっぽうで，「せっかくできたお友達が皆年中さんになるのに，もう一度年少さんクラスに留まらなければならない（投稿 15）」という欠点もあり，良い面ばかりともいえない。

また，早生まれの子どもの場合は，満３歳を過ぎたところですぐに集団生活に入ることができるのだが，他の子どもに比べて多くの面で力の格差があらわれやすい。したがって，早生まれの子どものなかには，時期を１年遅らせて年中クラスでの入園を考えるケースもあるのだが，この場合，年少児クラスからの入園よりも受け入れが少なく，希望の幼稚園に入園させるのが難しかったり，年少児クラスでの１年間ですでに仲良しグループが形成されているために適応に困難が生じたり，という弊害があるようである。

3. 親の事情

図１にも示したように，子どもにとってどのような環境を提供するのかという問題は，じつは親の事情とも関係しており，その内容は大きく時間的・物理的負担，経済的負担，心理的満足の３つに分類することができた。とくに最初に挙げた時間的・物理的負担については，この時期の子どもを持つ親，とりわけ母親の心理と密接につながった問題である。すなわち，それは子育てからの解放である。いうまでもなく，幼稚園への送り迎えの時間や弁当をこしらえる時間は，親の自由な時間を束縛する。したがって，図に挙げた延長保育の問題もまた，親にとっては幼稚園選びの重要な要件のひとつとなる。降園時間は，園によってまちまちだが，最近は子育て支援政策の一環として，比較的遅い時間までの預かり保育を実行しているところが増えている。子離れ後の社会復帰を目指す女性にとって，こうした柔軟な保育体制が有益であることは容易に想像できる。

経済的な負担は，上述した時間的・物理的な負担と相容れない場合が多々ある。たとえば，幼稚園での昼食の形態を例に挙げると，給食は弁当を作る手間を省くことができるという意味では，時間的負担の軽減をもたらすが，いっぽうでそのぶん保育料が高めに設定されやすいという弊害がある。通園バスの利用は，親が子どもを幼稚園まで送り迎えする負担を軽減するが，経済的な負担をもたらすうえに，担任教員とのコミュニケーション不足のような二次的な弊害にもつながりかねない。

さらに，親の経済的負担の問題は，子どもにとって良い環境を提供するという問題とも利害を生じやすい。お勉強重視の幼稚園や技能訓練を重視する幼稚園では，特別な教材が必要なことや，担任教員とは別に専門の指導者が教育に携わることがあり，親はそのための金銭的負担を覚悟しなくてはならない。また，遊具をはじめ設備が充実している場合にも，維持管理費と称して相応の金銭的負担を迫られることがある。

親がどの程度心理的な満足を得られるかという問題は，ここまでに述べてきた子どもの側の問題，ならびに親の側の事情のいずれとも密接にかかわっている事項だが，「制服がかわいい（投稿 101，107，145，159，194）」といった子どもの発達に直接かかわりのある環境とはいえないような内容も，意外と幼稚園選びの条件に挙げられることが多かった。また，子どもにとってそれが発達上良いのだと表面的には考えつつも，結局は親が心理的に満足したいことのほうが重要視されており，親自身もそのことに気づいているところもあるようだ。園庭のことについて触れたある投稿者は，このあたりの本音について，「（中略）子供本人にとっては広さはあまり関係ないのかなぁ（投稿 89）」と述べていた。

最後に，心理的な満足と関連して，「気楽さ（投稿 63）」ということを取り上げておきたい。これにはたとえば，親同士の付き合いの問題がある。幼稚園での生活がはじまり，子ども同士の親交が深まるにつれ，仲の良い子ども同士がお互いの家を行き来するなど，親同士が園以外の場で接する機会が生じる。ものごとの考えかたや家族背景，経済観念があまりにかけ離れた親同士はこうしたかかわりあいに心理的な負担を感じるであろうし，結果的に子ども同士の園外での交流を妨げるようなことにもなりかねない。したがって，幼稚園選びを進めるうえでは，周りの親の様子を把握することにも重要な意味があるとの考えがある。あとにも触れるが，入園説明会のような場は，幼稚園そのものに関する情報を入手するうえで有効なだけでなく，どういう階層の親が周りにいるかを確認するうえでも，親にとっては重要な判断材料となるのである。

4. ここまでの概要

幼稚園選びは，子どもの発達全般にかかわる親のさまざまな考えや思い込み，期待などが複雑に入り組んだものであることがわかった。ひとつには，「子どもに適切な環境を与えられるのは親をおいてほかにいない」という考えである。この考えは，子どもの年齢が低いときほど顕著で，幼稚園選びもまた，こうした強い信念に基づいていることが確認された。

親が幼稚園に望む環境としては，子どもの側面では，1）さまざまな能力の引き上げが期待できそうであること，2）それが心地よいものであること，の2点が考慮され，いっぽう親の側については，1）時間的・物理的負担が少ないこと，2）経済的負担が少ないこと，3）心理的な満足が得られること，の3点が重要であること，が明らかにされた。ある環境の子どもにとっての価値と親にとっての価値とが必ずしも一致しないことが明らかになった点は，本研究の成果のひとつである。こうした視点は，Bradley（2002）の枠組みに欠けていた部分といえる。

子どもの側，親の側それぞれの利害を完全に満たすような幼稚園選びはほとんど不可能であり，そのことが幼稚園選びを目前に控えた親を悩ます実態であることがここまでの分析からわかった。

5. 情報をいかにして入手するか

幼稚園選びにおいて，できるだけ正確かつ有意義な情報を入手することは不可欠である。だが，情報入手の方法はさまざまである。個々の幼稚園が提供する募集要項やパンフレット（投稿66）を入手し，そこに記載されている教育方針その他を参考にしたり，あるいは説明会（投稿11，36，105，126，183）に参加して話を聞いたりというのが最も基本的なやり方である。ほかには，実際にその園に子どもを通わせている，もしくは通わせた経験のある親の体験談や評判（投稿24，60，97，117）も情報源として重要である。本研究が分析の対象としたインターネット掲示板も，こうした情報交換の場として機能しているといえる。さらには，実際に保育の内容を見学したり，行事に足を運んだりして，そこで生活する園児や担任教員の様子，教室や園全体の雰囲気を感じ取ることも重要である（投稿11，88，118，150）。ある投稿者は，見学会への参加を目前に控えて「（中略）いただいた情報をもとに，あとは直接園に足を運んで，何かを感じとってきます。（投稿92）」と表現していた。

討　論

親が幼稚園を選ぶに際して考える環境は，Bradley（2002）の提唱した枠組みの最初の4つ（sustenance, stimulation, support, structure）にうまく対応することがわかった。なお，5つめのsurveillanceは，子どもに与えられた環境を常時監視し，状況に応じて調整を試みることを意味するので，幼稚園選びという事項にはそぐわなかったものと思われる。

また本研究では，幼稚園選びという行為が，子どもにとっての環境調整であると同時に，子どもの入園後に生じる親の環境の変化をも考慮されながら行われることであることが明らかとなった。とりわけ母親にとっては，子どもの幼稚園入園は，子どもから時間的にも物理的にも距離を置くことのできる大きな出来事である。親はそのように，子どもから解放されたいという欲求も持ちながら子育てを行っているのが本来なのである（根ケ山，1995）。そうした親の側の事情と，ある環境が子どもにもたらす効果や意味，価値の葛藤をカウンターバランスし，どこに重み付けするか，何を最優先に考えるかを考慮しつつ，幼稚園選びがすすんでいくといえる。

親の抱くこうした葛藤の背景にはふたつのことがらが考えられた。ひとつは，この時期の子どもの環境をいかようにも変えることができるのは親にほかならないという自負，もうひとつは，3〜4歳という時期を子どもの発達にとって特別なものとみなすこと，である。とりわけ後者については，その時期を逃すと取り返しがつかない，といった極端な思い込みにまで発展する可能性を秘めており，早期教育熱の高まりとも関連することが推察された。では，このような考えかたが根強いのはなぜか。発達研究者にもその責任の一端はある。われわれはつい，「こう育てれば子はこう育つ」というような図式で物事をとらえ，そう発言したり公表したりしがちである。しかし，むしろ発達という現象はもっと柔軟で，しなやかなものであることを，積極的に伝えていくことが必要かもしれない。

幼稚園選びに悩む親（とくに母親）の情報交換の場であるインターネット掲示板を対象に，投稿内容

の分析を行い，そこから，子どもの環境調整者としての親の役割や心理的背景を探ることができた。だが，本研究にはいくつかの問題点も残されている。

第一に，データ収集の方法である。冒頭にも記したように，インターネット掲示板には，基本的に匿名であることや，時間帯を問わず気軽にアクセスでき，比較的短時間に情報が得られることなど，多くの利点がある。だがいっぽうで，利用者に大きな偏りがあることも指摘しておかなくてはならない。そもそもこの種の掲示板には，何らかの悩みや問題を抱えた者が集まりやすい可能性が高く，本来の個人差が相殺されてしまっている可能性がある（坂元，2002）。今後は，本研究で得られた分析結果の妥当性や信頼性を，より広い対象に向けての調査を通じて検証していかなくてはならないであろう。

第二に，保育所のような幼稚園以外の場を分析に含めなかった点である。幼稚園への入園を考える母親の大半は専業主婦であり，仕事を持つ母親がいっそう増えつつ状況を考えると，今後は，対象を保育所にまで広げる必要があるだろう。そうすることによって，子どもの年齢や母親の就労状況までも変数に加えた分析が可能になるものと思われる。

引用文献

Bradley, R. H. (2002). Environment and Parenting. In M. H. Bornstein (Ed.), Handbook of Parenting Vol. 2 (2nd ed., pp. 281-314). New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

Bronfenbrenner, U. (1999). Environments in developmental perspective: Theoretical and operational models. In S. L. Friedman & T. D. Wachs (Eds.), Measuring Environment across the Life Span (pp. 3-30). Washington DC: American Psychological Association.

Harkness, S., & Super, C. M. (1986). Culture and Parenting. In M. H. Bornstein (Ed.), Handbook of Parenting Vol. 2 (2nd ed., pp. 253-280). New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

根ケ山光一（1995）　子別れの心理学　福村出版

Oda, M., Taniguchi, K. Wen, M., & Higurashi, M. (1989). Effects of high-rise living on physical and mental development of children. Journal of Human Ergology, 18, 231-235.

坂元 章（2002）　インターネットの心理学　―教育・臨床・組織における利用のために―　学文社

（受理年月日　2004 年 3 月 2 日）